



TITLE:

<大會抄録>洪武から永樂へ・再論

AUTHOR(S):

檀上, 寛

CITATION:

檀上, 寛. <大會抄録>洪武から永樂へ・再論. 東洋史研究 1997, 56(3): 674-675

ISSUE DATE:

1997-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155140>

RIGHT:

シャーヒン教授との共同研究として進めているが、今回は、その臺帳の内容及びそれをもつ意味について、中間的な報告を行いたい。報告の中心は、遊牧民集團の構成と彼らに對する課税システムになる豫定である。

創造論者ガザリー

中 村 廣治郎

ガザリー(一一一一年没)はイスラム史上最大の思想家の一人であり、哲學を批判し、自らスーフイズムに轉向し、それを正統化するに大いに寄與した。このようなイスラム世界でのガザリー像に比して、ヨーロッパでのガザリー像は大きく變つてきた。中世以來、理由は様々であつたが、彼は實際には哲學者ではなかつたかと思はれ、疑われてきた。その根本の理由は、彼自身哲學に大いに引かれる所があつたからであるが、それでも今世紀の半ば頃、W・M・ワットらの功績で、正統アシュアリー派神學者としてのイメージがほぼ定着したかに思えた。ところが、最近またガザリーへの哲學思想の影響が強調されるようになり、R・フランクのようにガザリー思想を流出論哲學的に解釋する者が出てきた。確かに、晩年の彼の神祕思想をそのように見ることは不可能ではないかもしれないが、それは神祕體驗の心理學的記述であつて、實在論的に理解されてはならない。その意味で、彼は確かに幾つかの點で傳統のアシュアリー派の枠を越え出ることゝあつたにしても、最終

的にはこの派の創造論に留まつていたと思われる。

洪武から永樂へ・再論

檀 上 寛

最近、明初という時代がとみに注目を集めている。一つは、明末清初の社會變動に先行する舊體制の意味を、あらためて考察しようという問題關心から。今一つは、現代中國の起點を明初に求めようという、より現代的課題に根ざした理由による。

この場合、明初體制に對するイメージは、極めて統制的かつ一元的なものとしてとらえられよう。國家と社會との政治的力學のものと、秩序の崩壊ごとに秩序の統括者たる皇帝へと權力が集中し、結果として誕生したのが明朝專制國家である。まさにその意味で、明朝專制國家は中國社會の「體制的歸結」なのであり、明初の社會が統制的かつ一元的なもの、當然といえば當然といえる。

こうした明朝專制國家の最終的完成が、永樂十九年の北京遷都にあることには異論がなからう。ただし、北京遷都と專制體制の完成がどう關連しているのかとなると、その解釋は一樣ではない。というよりも、北京遷都の持つ意義については、報告者を含めて對內的、對外的いずれか一方の觀點に偏り、兩者を總合した上で、專制主義の問題とからめて理解する視座が、いまだ提示されていない。

本報告では、明初の專制主義の高まりのもと、明朝國家による國內外への統制策の一環として、北京遷都が必然化された経緯を論

じ、あわせて洪武・永樂時代の中國史上の位置についても、從來とは異なる角度から考えてみたい。

靖難功臣の封爵について

川 越 泰 博

壬午年——建文四年・洪武三五年（一四〇二）は、明代初期の歷史上最大の激動の年であった。三年前の七月四日に始まった靖難の役がようやく終息し、瓦解した建文政權に代わって永樂政權が誕生したのであった。建文政權に仕えた官僚の行動様式は様々で、あるものは永樂政權に投降し、あるものは臣従を拒否して殺され、あるものは逃亡した。このような状況の中で、永樂帝は、七月一日即位詔を發布して、新政の基本方針を打ち出した。そして、九月四日には、靖難功臣に對する封爵を發表し、あらたに公侯伯の三爵を選出したのである。このとき、封爵を賜與されたのは、合計三一人であったが、この發表は、世間をあつと言わせたに違いない。江湖において靖難功臣と目される人々の名と著しく軋屈していたのである。たとえば、通常靖難功臣第一とされる道衍（姚廣孝）の名がみえないだけではなく、逆に、靖難の役期に建文側の大將軍であった李景隆のような人物が封爵の対象になっているのであり、封爵者名を聞き知った人々は、一樣に違和感を抱いたであろう。洪武三五年九月四日發表の封爵は、なぜ世間の受け止め方と異なるものになったのであろうか。本發表においては、この封爵問題について検討を加

え、併せて當該時期の永樂政權の在り様を考察しつつ、右の理由を探りたいと思う。

梁啓超「新民說」の歴史的評價

狹 間 直 樹

梁啓超といえば『新民叢報』、『新民叢報』といえば「新民說」である。「新民說」とは、周知のように、中華體制下の臣民が近代世界内の國民（新民）になることの必要性を多角的に説いた文章である。書かれたのは一九〇二年から〇六年にかけてのことで、梁の多くの重要文章と同様にこれも「未完成」品である。

二〇世紀初頭の中國の知識人は、毛澤東も胡適も、ほとんど全てがその影響を受けて青少年時代をすごしたのであった。當時における壓倒的な影響力はだれしも認めるところなのにかかわらず、現今の歴史學界での「新民說」評價はそれに適わしいものになっているとはいえない。むしろ往々にして、急進的革命から漸進的改良への「分水嶺」的な位置づけさえ、爲されているくらいなのである。孫文との關係の變化、康有爲による叱責等、それを傍證する事柄が數多くあることも認められねばならないのだが。

しかし、そのように單線的な前進後退をおこなう「說」が、一時代を被りような影響力を發揮できるとはいささか考えにくい。人々の感情に訴え精神に染みこみ、時代の轉換に大きな役割を果たしたものは一體いかなるものであったのか。梁啓超の「新民說」のもつ